

日蓮聖人遺文中に見られる法然像

奥野本洋

日蓮聖人が法華経を流布するにあたり、日本国中に広まっていた念仏は大きな障害であった。聖人は念仏等より法華経がすぐれているということを説くことによつて、自身の意志を大衆に知らしめようとされた。そこで、批難破折される側の法然上人について見ていくことにより、聖人の教えの一端が見られると思う。法然上人と日蓮聖人との間には、時代のづれがあり、聖人在世中の念仏者は法然の弟子、門下であるが、それらの諸師を排斥するよりも、日本の念仏の根本と目される法然を責めることが重要であつたろう。その頃の国内の念仏の状勢について、聖人は次のように述べられる

「善導、法然が末の弟子等……国中に充満せり。」⁽¹⁾

「日蓮いかにかしこくも明圓房、公胤僧上、顕真座主等にはすぐべからず。彼の人人だにもはじめは法然上人をなん(難)ぜしが、後にみな墮ちて、或は上人の弟子となり、或は門下となる」⁽²⁾

「善導、法然が一門は、すわすわ、天台真言の人人も実に自宗が叶ヒがなければ念仏を申すなり。わづらわしくこれを学せんよりは、法華経をよまんよりは、一向に念仏を申して浄土にして法華経をもさとりべしと申す。」⁽³⁾

というようであつた。そのように多くの念仏者の中で、法然上人を破折することは、聖人の身にも及ぶことにもなつてくる。

「法然上人之孫弟念阿弥陀仏、道阿弥陀仏等諸聖人等ノ訴訟ニ日蓮ヲ状ニ云ク、欲下早ク被レ召決ニ日蓮ニ摧破ニ邪見ニ興中隆正義事云云。」⁽⁴⁾

「念仏者等僉議して云ク、此れ程の阿弥陀仏の御敵、善導和尚、法然上人をのる(罵)ほどの者が、たまたま御勘氣を蒙りて此島に放されたるを、御赦免あるとていけ(生)て帰さんは心う(憂)き事也と」⁽⁵⁾

しかし、聖人は、この法然を例にあげ、強く糾弾せねばならぬとの覚悟の上に「謗法墮獄」とまで言及されていく。「此五十年が間、一天四海一人もなく法然が弟子となる。法然が弟子となりぬれば、日本国一人もなく謗法の者となりぬ。」⁽⁶⁾

一、謗法墮獄邪師法然

聖人が法然を見る時、悪人、大謗法の者等呼称に差異が見られるが、大別すると、一、悪人、悪知識、一、師子身中の虫、天魔が身に入る等の表現のちがいであり、いづれも謗法の者ということである。一、悪人、悪知識等と見られる遺文を見ていくと次の如くである。悪人と指しているのは、

「我カ道ヲ壞乱シ悪人転多如三海中沙」……即法然房是レ也と……」⁽⁷⁾

「滅後悪人弘法・慈覚・智証・善導・法然等是也。」⁽⁸⁾

似たような表現では、

「悪友トハ法然・弘法・慈覚・智証等是也。」⁽⁹⁾

又、悪知識と見られるのは、

「法華経誹謗の悪知識たる法然・弘法等をたのみ」⁽¹⁰⁾

御講聞書には、

「法然・弘法等ノ大悪知識是也云云。」⁽¹¹⁾

「末法当今ニ於テ悪知識ト云ハ法然・弘法・慈覚・智証等ノ権人謗法ノ人人ナリ」⁽¹²⁾

その他、悪……とつくものでは、

「云、法然、有、悪比丘。」⁽¹³⁾

というものがある。

邪智とも述べられているが、それは、

「悪世ノ中ノ比丘ハ邪智ニシテ心詭曲等云々。……善導・法然……」⁽¹⁴⁾

とみられる。謗法の者との表記は、

「善導・法然等の謗法の者にたぼらかされて」⁽¹⁵⁾

「此五十余年に法然という大謗法の者いできたりて……」⁽¹⁶⁾

「善導・法然も是に例して知ぬべし。誰か智慧有ん人、此謗法の流を汲て……」⁽¹⁷⁾

「善導・法然謗法の者なれば……」⁽¹⁸⁾

「所謂弘法・慈覚・智証・善導・法然・達磨等ノ大謗法ノ者也。」⁽¹⁹⁾
等とある。直接的に謗法とは書かれていなくも、次のように反語的に述べられることもある。

「我等を如説修行の者といはずば、釈尊天台伝教等の三人も如説修行の人なるべからず。……善導・法然……等は即法華經の行者と云はれ、……」⁽²⁰⁾

その他では、

「源空深ク迷ニ此義ニ故ニ於ニ往生要集ニ起シ僻見ニ」⁽²¹⁾

「善導・法然竝に当世の学者等が邪義に就て」⁽²²⁾

というように、僻見・邪義の表現がみられる。これらは皆ニアンスの差こそあれ、いづれも法然が謗法者であるという内容である。守護国家論中には、

「習ニ法華・真言等ヲ諸人ヲ譬ニ群賊・惡衆・惡見ノ人等ニ源空カ重罪」⁽²³⁾

「源空ハ謗法ノ者也。所謂選択集ノ意ハ令ニ人捨ニ法華・真言ニ定メ書シ了ヌ」⁽²⁴⁾

「法然上人ノ書ニ物語ニ間於ニ法華真言ニ付レ難ヲ或ハ譬ニ去年ノ曆祖父ノ履」⁽²⁵⁾

とあり、法華と真言を誹謗する法然の表現が見られるのだが、三十八才鎌倉の地での著であるそれに対し、五十四才身延で著わされた曾谷入道殿許御書では、

「弘法大師ノ十住心論……此等ノ謗法謗人ハ慈恩得一之超ニ過シ三乘真実一乘方便之狂言ニ善導法然之雲ニ泥千中無一捨閑地之過言ニ也」⁽²⁶⁾

と斥し、真言の立場が逆転し悪知識謗法の法然でも弘法に対すれば、その罪も軽いという表現がみられるのである。

次に、法然は智者であるが、天魔がその身に入ったが為に、臨終の相悪く、墮獄を示したとの表現を追っていくならば、

「浄土宗の高祖也。十七歳にして一切経を習ヒ極め、天台六十巻に渡り、八宗を兼学して、一代聖教の大意を得たりとのしり、天下無双の智者、山門第一の学匠也まよ。然るに天魔や其身に入りにけん、広学多聞の智慧も空く、諸宗の頂上たる天台宗を打捨て、八宗の外なる念仏者の法師と成りにけり。」⁽²⁷⁾

というふうである。この表現は、立正安国論中にも同意のものがみられる。法然上人の智徳というものはその当時大したものがあったのである。それを聖人は、彗星とも称した。

「後鳥羽院ノ治天下建仁年中日本国ニ出すニツ彗星ノ名ヲ曰フ源空法然。」⁽²⁹⁾

それほど称賛された法然だが、その身に天魔・悪魔が入ったというのである。

「権大乘・実大乘経ヲ極メたるやうなる道綽・善導・法然等がごとくなる悪魔の身に入りたる者」⁽³⁰⁾

「而ルを天魔の身に入ツて候善導・法然など……」⁽³¹⁾

「然ハ後鳥羽院ノ御宇建仁年中ニ法然、大日ノ二人ノ有リ増上慢ノ者。悪鬼入リ其身ニ狂惑シ國中ノ上下。」⁽³²⁾

「観経へすかしをとす悪友は、善導・法然是也。此は第六天の魔王が智者の身に入ツて善人をたばらかす也。」⁽³³⁾

天魔が身に入ったというのではなく、法然自らを指して天魔との表現もみられる。

「一切衆生、善導・恵心・永観・法然等の大天魔にたばらかされて」⁽³⁴⁾

天魔等が智者の身に入って、せっかく大乘の教学を習得しながら謗法者になってしまふというのは、師子身中虫といわれることであらう。

「謗法の法然に同じて如_レ師子ノ身中ノ虫ノ自食_ニ師子_ニ。」⁽³⁵⁾

「師子の身の中の虫の師子を食フと、仏の記シ給フはまことなるかなや」⁽³⁶⁾

謗法者である法然は、愚癡の道俗や女人をたぶらかしたり、すかしたりする為に、墮獄となり、悪い臨終の相を示す

こととなる。

「法然上人竝ニ所化ノ衆等ノ称_ヲ可_レ墮_ニ阿鼻_ニ大城_ニ由_ト。」⁽³⁹⁾

「如_レ是申師も弟子も阿鼻の焰をや招かんずらん」⁽⁴⁰⁾

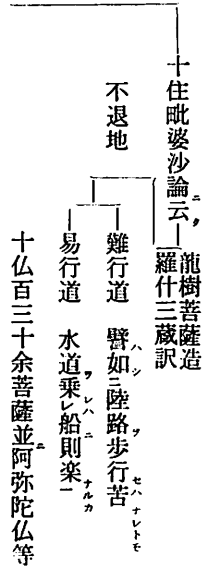
「法然房が墓所をば、仰_ニ付テ犬神人_ニ堀_ニ出_シ之_ヲ、被_レ流_ニ鴨河_ニ畢_ス。」⁽⁴¹⁾⁽⁴²⁾

「邪師源空存生之間永ク沈_ニ罪_ニ条_ニ滅_ニ後_ニ之_ヲ今ハ且_レ勿_ニ死_ニ骨_ニ。」⁽⁴³⁾

二、法然上人の系譜と捨閉闍拋

一代五時⁽⁴⁴⁾圖に浄土の系譜が次のようにみられる。

天竺十四五六卷



齋世

——曇鸞法師 本三論宗人作「淨土論註」一卷

唐世

——道綽禪師 善導師也作「安樂集」一卷

安樂集云、大集月藏經云、我末法時中、億億衆生起行修「道末レ有」
一人得者。当今末法、是五濁惡世、唯有「淨土」一門、可「通入」
「路」。

唐世

——善導 玄義一卷。序分義一卷。定善義一卷。散善義一卷。觀念法門一卷。

往生禮讚一卷。般舟讚一卷。法事讚上下。已上九卷。

隱岐院御宇建仁年中今五十余年也

——法然源空

——選撰集一卷

未レ有三人得者二千中無レ一

除「淨土三部經」之外法華經等一切。除「阿彌陀仏」一切仏菩薩一切神祇等。

難行——聖道——雜行

捨閑闍搦 天台法華宗等八宗

易行——淨土——正行

——阿彌陀仏・十即十生百即百生

六百三十七部二千八百八十三卷

聖人が法然を取りあげ攻撃される時には、必ずといつてよい程、道綽・善導等の名があがっている。守護國家論に「曇鸞・道綽・善導・慧心等ノ諸師皆於「法華真言」等ノ諸經「作」末代不相応ノ釈」。依レ之ニ源空竝ニ所化ノ弟子以

と述べ、曇鸞から恵心僧都源信をして法然への流れがみられる。善無畏鈔に、

「曇鸞ノ難易、道綽ノ聖道淨土、善導が正雜二行乃名目ヲ引キ天台・真言等の大法ヲ念仏乃方便と成せり。」(46)

法然は念仏宗を立てるにあたり、自宗をほめる為に他宗を嫌う常套手段を用いたのだと聖人は言われる。(善無畏鈔取意)道綽については撰時抄に次の如く述べている。

「漢土の道綽禪師が云ク、正像二千、四箇の五百歳には、小乗と大乘との白法盛なるべし。末法に入ッては彼らの白法皆な消滅して、淨土の法門念仏の白法を修行せん人計り生死をはなるべし。」(47)

「道綽禪師という者あり。唐の世の者、本は涅槃經をかうじけるが、曇鸞法師が淨土にうつる筆を見て、涅槃經をすてて淨土にうつて聖道・淨土の二門を立テたり。又道綽が弟子に善導という者あり。雜行・正行を立つ。」(48)

そして、その道綽の弟子の善導が雜行正行ということを言い出したのだと。

「善導は法華經を雜行と名け、剩へ千中無一として千人信ずとも一人得道の者あるべからずと書り。」(49)

当時の人々に、善導・法然は、弥陀の再誕あるいは勢至菩薩の化身とおおがれていた為、その者たちが法華經を誦することは、一大事である。それに対し、聖人は、彼らが千中無一、未有一人得者というが、それは經に照らしての見解ではないことを示すのである。聖人がそれについてふれている御書をみるならば、化身・再誕とみれるのは、

「号ニ勢至ノ化身ト或ハ仰ニ善導ノ再誕ト」(50)

「生身の弥陀仏とあがむる善導和尚」(51)

「善導和尚は弥陀善逝の応化、或は勢至菩薩の化身と云へり。法然上人も亦然也。善導の後身といへり。」(52)

「善導和尚は西土の教主弥陀如来の化身なり。法然上人は大勢至菩薩の化身なり。」⁽⁵³⁾

「阿弥陀仏の化身とひびかせ給フ善導和尚……勢至菩薩ノ化身とあをがれ給フ法然上人……」⁽⁵⁴⁾

という如くである。又、千中無一等は広範圍にわたって上げているが、一部を上げれば、

「未有一人得者十即十生百即百生千中無一」⁽⁵⁵⁾

「法華経は末法に入ては未有一人得者千中無一等」⁽⁵⁶⁾

「十即十生百即百生乃至千中無一」⁽⁵⁷⁾

「善導・法然が千中無一の悪義」⁽⁵⁸⁾

とある。法然は、善導らの釈を料簡して、末代には念仏以外の法華経などを雑える念仏では、千人が持つとも一人として仏になることなく、一向に念仏する者は、十人が十人成仏するのだというのであるが、聖人は、

「経文には若有聞法者無一不成仏と談じて、此経を聞けば十界の依正皆仏道を成ずと見上たり」⁽⁶⁰⁾

「此事本より私の語を以て是を難すべからず、経文を先として是をただすべきなり」⁽⁶¹⁾
と述べ、私の語で判断すべきでないことを指摘する。

次に、捨閉闍拋について見ていくならば、日蓮聖人が依法不依人の依法とする法華経を、法然は「捨閉闍拋」と扱っているのである。即ち、法華・真言等の難しい修行は必要ないとしたのである。そこで聖人遺文にも、この法然の四字の言葉に対して反撃する点が処々に見られる。四字についてふれているところを見ると、

「法然が捨閉闍拋」⁽⁶²⁾

「法然上人ノ捨閉闍拋ノ四字」⁽⁶³⁾

「法華經の門を閉ぢよ」(64)

「法然が捨閉闍拋」(65)

「法然上人云ク捨閉闍拋云云」(66)

「末法には法華經の門を堅く閉て人を入レじとせき」(67)

「對ニ称名念仏ニ難行方便捨閉闍拋」(68)

「法然が法華經をなげすてよ」(69)

「法然は捨閉闍拋と云云」(70)

「法然が捨閉闍拋等」(71)

「依ニ法然之選擇ニ則忘レ教主ニ而貴ニ西土之仏馬太、拋ニ付屬、而闍ニ東方之如来、唯專ニ四卷三部之經典、空ク拋ニ一代五時之妙典」(72)

「法然が捨閉闍拋の文」(73)

「此三人の念仏を弘めさせ給ヒし時にのたまはく、未有一人得者、千中無一、捨閉闍拋等云云」(74)

「法然上人は捨閉闍拋」(75)

「法然ノ捨閉闍拋」(76)

「法然が捨閉闍拋の四字」(77)

「捨閉ノ閉ノ文字ハ閉レ眼ヲ」(78)

「法然ハ捨閉闍地ト云ヒ」(79)

以上、捨閉闍地の主なるところを上げたが、法然はそれを選択集にて述べているのである。

「貴踐上下皆以ニ選択集ニ思ニ化法ノ明鏡」(80)

「今ノ世ノ道俗ハ貴ニ選択集ニ故ニ」(81)

「有ニ法然ニ作ニ選択集、矣則破ニ一代之聖教、遍ク迷ニ十方之衆生」(82)

日蓮聖人が、法然は選択集にて捨閉闍地と書き法華經を捨ててゐることは謗法であると攻撃されるのに対し、その門下の者達の反論が見られる。

「佐渡國の念仏者等數百人、印性房と申スは念仏者の棟梁也。日蓮が許に来て云ク、法然上人は法華經を抛テよとかかせ給フには非ず。一切衆生に念仏を申させ給ヒて候」(83)

法然上人が法華經を抛よと言つた裏には、法華經が末代の機に叶ないということが述べられるのであるが、日蓮聖人は、そのような説は用いないのだといわれる。聖人は開目抄の中で

「法然云ク諸行ハ非レ機ニ失レ時ヲ等。云云…… 伝教大師云ク正像稍過キ已テ末法太有レ近。法華一乘ノ機今正其時。何ヲ以テ得レ知。安樂行品ニ云ク末世法滅ノ時也云云。…… 彼は一切經に証文なし。此正法華經によれり」(85)

と述べ、むやみに法然を攻撃してゐるのではなく、それだけの理由があることを示している。

「於此國土、以ニ權教ニ取、人ノ意、失、実教、者有レ之歟如何。答テ曰ク爾也。問テ曰ク其証擿如何。答テ曰ク法然上人所造ノ等選択集是也。今出ニ其文、合ニ上ノ經文、令レ露ニ顯ニ其失」(86)

「法然・隆寛興ニ浄土宗、破ニ実大乘、付ニ権宗、捨ニ一切経、立ニ教外。」⁽⁸⁷⁾

「於ニ法然、者不レ知ニ純円之機・純円之教・純円之國」⁽⁸⁸⁾。為ニ権大乘ノ一分ニ觀経等ノ念仏不レ辨、権実・震旦ノ三師之釈以レ之ヲ此國ニ令ニ流布ニ実機ニ授ニ権法、純円ノ國成ニ権教ノ國……」

いづれも、権大集の觀経等を依りどころとしている点を強く指摘しているのである。

「浄土宗と申スも権大乘の一分なれども、善導・法然がたばかりかしくて、諸経をば上げ觀経をば下シ、正像の機をば上げ末法の機をば下、末法の機に相叶へる念仏を取出シて、機を以て経を打ち、一代の聖教を失ひて念仏の一門を立てたり。」⁽⁸⁹⁾

以上聖人の法然に対する批難、攻撃を見てきたが、聖人と時代を同じうした法然の弟子を批難するよりも、やはり法然を元凶とみられている。そして、同時に、道綽、善導等の源流をあげ、法然の思想の依りどころをついている。

聖人の他宗批難は、念仏宗に限ったことではないが、聖人の立教開宗と同時ぐらいに念仏への攻撃が始まり、それが一番永い期間に及んでいる点に特長がある。又、その信仰を持つ層が聖人の教化の対象とする層、即ち一般大衆にあった事や、一方は弥陀の名号、一方は法華経の名号を唱へるといふ類似点があった為に、自分の意図する宗教を流布する為には、何をおいても破折せねばならぬ相手であった。

〔註〕

- (1) 種々御振舞御書(定九八四)
- (2) 破良觀等御書(定二八四)
- (3) 十章鈔(定四九〇)
- (4) 行敏訴狀御会通(定四九七)

- (5) 種々御振舞御書(定九七八)
- (6) 撰時抄(定一〇三二)
- (7) 念仏無間地獄鈔(定三九)
- (8) 御講聞書(定二五七六)
- (9) 御講聞書(定二五九〇)
- (10) 上野殿後家尼御前御返事(定三二九)
- (11) 御講聞書(定二五四五)
- (12) " (定二五六五)
- (13) 法華本門宗要鈔(定二一五一)
- (14) 最逆房御返事(定六二二)
- (15) 題目弥陀名号勝劣事(定二九八)
- (16) 南条兵衛七郎殿御書(定三二五)
- (17) 星名五郎太郎殿御返事(定四一九)
- (18) 四糸金吾殿御返事
- (19) 御講聞書(定二五六五)
- (20) 如說修行鈔(定九三七)
- (21) 守護國家論(定一一二)
- (22) 善無畏三藏鈔(定四七五)
- (23) 守護國家論(定一〇五)
- (24) " (定一〇六)
- (25) " (定一一七)
- (26) (定本九〇七頁)
- (27) 念仏無間地獄鈔(定三八)
- (28) 立正安國論(定二一七)
- (29) 当世念仏無間地獄事(定三二二)
- (30) 開目抄(定五五六)
- (31) 一谷入道御書(定九九二)
- (32) 安國論御助由來(定四二三)

- (33) 兄弟抄(定九二三)
 (34) 智妙房御返事(定一八二六)
 (35) 二乗作仏事(定一五七)
 (36) 撰時抄(定一〇四一)
 (37) 星名五郎太郎殿御返事(定四一九)
 (38) 千日尼御前御返事(定一五四二)
 (39) 災難対治鈔(定一七一)
 (40) 唱法華題目鈔(定一九一)
 (41) 念仏無間地獄鈔(定四〇〇)
 (42) 立正安国論(定二一九)にも同じようにみえる。
 (43) 念仏無間地獄鈔(定四一)
 (44) (定二八三、五)
 (45) 定一〇三
 (46) 定四一一
 (47) 定一〇〇六
 (48) 定一〇三一
 (49) 聖恩問答鈔(定三八三)
 (50) 念仏無間地獄鈔(定三九)
 (51) 聖恩問答鈔上(定三六一)
 (52) // (定三六一)
 (53) 星名五郎太郎殿御返事(定四一六)
 (54) 四条金吾殿御返事(定六六三)
 (55) 行敏訴状御会通(定四九八)
 (56) 開目抄(定六〇七)
 (57) 四条金吾殿御返事(定六六三)
 (58) 撰時抄(定一〇四〇)
 (59) 妙法比丘尼御返事(定一五六八)
 (60) 聖恩問答鈔上(定三六一)

- (61) 星名五郎太郎殿御返事(定四一六)
 (62) 題目弥陀名号勝劣事(定二九九)
 (63) 当世念仏者無間地獄事(定三二三)
 (64) 六郎衞長御消息(定四四一)
 (65) 法門可被申様之事(定四四五)
 (66) 行敏訴状御会通(定四九七)
 (67) 開目抄(定六〇八)
 (68) 曾谷入道殿許御書(定九〇七)
 (69) 撰時抄(定一〇一九)
 (70) 下山御消息(定一三二九)
 (71) // (定一三三九)
 (72) 立正安國論(広本)(定一四六四)
 (73) 教行証御書(定一四八三)
 (74) 妙法比丘尼御返事(定一五五七)
 (75) 諫曉八幡抄(定一八四五)
 (76) 一代五時函(定二二八五)
 (77) 断簡(定二四九五)
 (78) 御講聞書(定二五八八)
 (79) // (定二六一六)
 (80) 念仏無間地獄抄(定三九)
 (81) 守護國家論(定一二二)
 (82) 立正安國論(定二一四)
 (83) 佐渡御書(定六一六)
 (84) 一代聖教大意取意(定七五)
 (定本五九四)
 (85) 災難対治抄(定一六七)
 (86) 教機時国鈔(定二四五)
 (87) 当世念仏者無間地獄事(定三一八)
 (88) 本尊問答鈔(定一五八一)